

## 患者の語りは病いを連続した人生の一部にする

第20回大会長 楡木満生（立正大学）

患者は、なりたくて患者になるのではなく、ある日突然身体の一部の異常に気づき、病院を訪れたら、患者と呼ばれる身分になっていたのである。そしてあらためて食行動が悪かったといわれたり、運動不足を指摘されたりして、日頃の生活習慣の改善を迫られたりすることになる。ここで多くの患者は環境の不連続に戸惑い、わが身に降りかかった新たな災難をどのように対処してよいかわからないままに困惑の中にあることになる。

すでに日本保健医療行動科学会の大会では、この数年間患者の語り（ナラティブ）を大会テーマにしてきている。第19回大会が「ナラティブと保健医療」、第20回大会が「健康と病いの語りとコンテキスト」、第21回が「ナラティブとアート」と続いている。これは、患者の語りを聴くことが、本学会の目的と使命に密接に関係しているからである。患者の声に耳を傾けることが病いに主体的に取り組むことと合致しており、その重要性を気づき、学会の重点的施策として取り組んでいるからである。医療関係者が、患者に環境の急激な変化について語ることを促し、それにある時間をかけて耳を傾ける姿勢を示したときに、患者は初めて自分の生活の変化を語り始める。その語りの中で患者は病前の生活環境の話をしたり、いまの患者としての立場が本意に与えられたものであることの説明を始める。実は、語りはすべての一見不連続のように見える経験をつなぎ、その人なりの人生の意味をつくり出す作用をもっているのである。病気になるということは、いままでの生活スタイルを見直すチャンスでもある。しかし、身体の不調は実は身体の警戒信号だと考えると分かりやすい。突然の病いは、実は不連続に起きたのではなく、長い生活習慣の積み重ねで起きている。そのことを医療関係者から指摘されて気づくのではなく、インフォームド・コンセントでもらったデータを基に自らの言葉で病と人生とを重ねあわせて話しているうちに自然に分かってくることが、その後の治療の継続には重要になる。患者自身が自分の言葉で病気を理解し、主体的に病気と取り組むことができるようになることが、予後をよくすることになる。医療関係者が患者に援助できる時間は短く限られており、人生の残りは患者自身が自分の責任において生きなければならないからである。それぞれの患者が残された人生を有意義に送れるように、患者の語りを大切にしたいものである。